
アメザイク

梅崎風向

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アメザイク

【Nコード】

N5894H

【作者名】

梅崎風向

【あらすじ】

雨に好かれたばかりの物語。ある雨の日、ぼくは人を初めて殺した。

000（前書き）

多少残酷な表現が出て来るかもしれませんが。苦手な方は注意していただくか、ご遠慮ください。

ぼくは雨が嫌いじゃない。むしろ好きな方だ。超人的、超能力的、はたまた地球に、神様に嫌われているかもしれないと自分で疑いたくなるほどの雨男であることがその原因の一つであることは、もはや否定しがたい純然たる事実だ。

そんな特殊能力に不運なことに恵まれているぼくだからこそ、雨とは上手く付き合わなければならないし、また上手く付き合つと雨もそんなに悪くないと思えてきた。

ぼくがまだ今よりずっと小さかった頃、運動会や遠足、その他屋外を利用する学校行事、その全てが一つの例外もなく雨だった。ぼくとぼくの同級生の屋外での思い出は根こそぎ雨に奪われた。思い出したくもないことだがぼくの人生が大きく変わった日、その日も雨だった。

運命が変わった日、ぼくは初めて人を殺したのだった。

ぼくは心拍数の急激な上昇を感じていた。屋内、外は荒天の中、汗とも雨ともつかない、正確には理解できない透明な液体を身にまとった男と、朱とも、紅とも、赤とも、黒ともつかない液体を垂れ流している男がそこにいた。

透明な液体を身にまとっている男、それがぼくだ。朱とも、紅とも、赤とも、黒ともつかない液体を垂れ流している男は、友人”だった”男だ。

何不自由もなく、一般的に思春期を迎えたと同時に起こる生理現象のような反抗期もなく、すすくと、自分で言うのもどうかと思うが、真面目に、誰に対しても物腰柔らかかに育っていたのがぼくだ。誰に喧嘩を売るでも、買うでも、煙草を吸うでも、酒を飲むでもなく育ってきたのがぼくだ。誰と競うでもなく、普通に勉強し、普通に高校へ行き、普通に大学に入学した、それはぼくだ。そんな当たり前すぎる人生を歩んできたぼくだ。しかし、目の前に広がる海を眺めているぼくは、そんな人生からはかけ離れていた。

きっかけは推理小説家が人殺行為に適当な理由が必要、理由なき殺人は存在しないのだという観念からか、また、理由が存在しない限り殺人は起こり得ないという固定観念からかならず存在するとされている。しかし、だけど、ぼくが行った人殺行為に理由はあるか、と聞かれるとNOと答えざるを得ない。人を殺す、人の存在を消すのに理由なんていらぬ。ぼくはそう思う。それでも強いて理由を挙げるとするならば、知的好奇心が抑えられなかったという点だろう。

人はなぜ死を恐怖するのか。ぼくは、存在が存在しなくなるから怖い、恐いと感じるのだと考えている。どんな著名人が死んでも、

どんな無名の小さな命が消えようと、どんな悪党の命を消そうとも、結局往きつくところは一緒なのだ。時は残酷なほど優しい。だからこそ、そういった人の顔を忘れてしまう。そういった人の存在を忘れてしまう。そういった人がいたという証拠すらも忘れてしまう。当たり前のように毎日一緒にいた人のことですら忘れてしまう。時間ほど残酷なものはない。

とは言え、現在時間の次くらいに残酷なのはぼくであることは状況的に否定しがたい事実であることには変わりはない。

きっかけはなんだったんだろうか……。確か

ぼくは友人の引越しを手伝っていた。

名前は記号でしかなく、この一瞬後に存在していない人間であるため必要はないだろう。

とにかく引越しの片づけ作業中。台所（キッチンといえるほど洒落たもんじやない）の片づけをしていたぼくは新品の、まだよく切れそうな、刃こぼれのしていない、出来立ての、おニユーの、傷一つない、真新しい、目新しい、耳新しい、更^まな、柄すらもステンレスでできた抗菌加工のされた包丁を手に取り眺めていた。そんな時

「どうした？　なんかあったか？」

今にして思えば、実にタイミング悪く、そして絶妙な、巧妙なタイミングで話しかけてきた。

振り向くと同時にぼくは友人の頸動脈を真つ二つにしていた。そして友人は崩れ落ちた。絶望したような、諦めたような、疑問をばくに問いかけているような、なんとでも取れる色のない瞳をぼくに向けながら。

震えが止まらなかった。全身から発汗する。それが冷や汗なのか、

運動後と同じ発熱による発汗なのかは理解できない。ステンレスでできた包丁は手の平の発汗で滑り落ちた。総ステンレスだと滑るんだな。ぼくが買うときは気をつけよう。そんなどうでもいいことばかりを考えてしまう。人から”モノ”になった友人を眺めて、涙を流すわけでも、喚くでも、叫ぶでも、我鳴るでもなく、ぼくは小さく震えているだけで、発汗しているだけで、冷静に、泰然と、悠然と佇んでいた。手から零れおちた、いや毀れ落ちた、包丁の先端が鳩尾に刺さっていても、冷静に、泰然と、悠然と佇んでいられた。

数分後、バランスを崩した包丁が、胃を抉り出すように倒れ、包丁が今度こそ床に落下した音でぼくは正気を取り戻した。別の意味で震えが止まらなかった。今までの震えが興奮によるものだと知覚した瞬間だった。はつきりと、手に取るようにわかる。背中を冷たい感覚が這う。今度こそ冷や汗だ。幸いにも目撃者はいない。誰もいないはずだ。しかし、まだカーテンすらも取り付けていない窓には友人の右側面から噴き出した血で、海外の裏路地よろしく、ストリートアートの様相を呈している。ただし放物線に、ただし対角線をなぞる様に。

血と死体の処理をどうしたもんかと、考えていた。友人が死んだことなどどうでもよかった。また一つ命が無くなった、その程度の問題だ。新聞、テレビなどでどこで誰が死んだというニュースがあっても決してぼくらは心を痛めたりしない。知らない誰かが死ぬっていうのはそんなもんだ。仮に道ですれ違うくらいのことをしていたとしても、ぼくらにはそんなことは些事ではない。

改めてわかったことが一点。血というのは一種異様とも言える臭いを発すること。決して気分がよくなる臭いではない。むしろ頭痛を引き起こす臭いだ。密室という空間がいけなかった。臭いの充満が早い。湧き上がるすっぱいものを必死に飲み込み、事後の処理について考えるぼくはもうすでにズレてしまった人間なんだろう。

友人のメガネは、部屋の片隅まで飛んでいた。人間が何の支えもなく倒れるとメガネがこれほど飛ぶのかとぼくは思わず笑ってしまった。実に不謹慎。人が死んだというのに。まあ、ぼくが殺した人だけだ。

ピンポン

唐突に聞きなれない、ぼくの家とは違う音が鳴った。数瞬後にはそれをチャイムだと認識できた。しかし、この状況、かなりまずい。血なまぐさい臭いが部屋全体に漂ってる。ましてやワンルームだ。この臭いを防ぎようがない。チャイムはその後1秒間隔でしつこく鳴り続けている。ここは2階だ。下には車が停まっている。逃げられないこともない……か……？ と思索していると、電子キーを採用しているオートロックマンションという触れ込みのマンションのドアの鍵がガチャリと開いた。

反射的にぼくは包丁を構えた。ああ、もうぼくは戻れないんだなとこの瞬間にはつきりと知覚した。

ベルが鳴り、ドアが開き、包丁を構えたぼくと対峙したのは、驚くほど、綺麗で、奇麗で 鋭利で、怜悯な目をした女性だった。

この惨状とも言える光景を目の当たりにしても、眉一つ動かさず、目の色も変えず、見た目の綺麗さ、美麗さとは掛け離れたガサツな動作で ズカズカという表現が適切だろう 部屋に上がり込んで来た。20センチはあろうかという高いヒールのまま、カツカツと小気味よい音を立てたまま。まるでぼくが存在など目につかなかったように。

死体を一瞥し、穴の開いた鳩尾にヒールの踵部分をグツと差し込み、ようやく楽しそうに、愉しそうに、表情を変えつつグリグリと踏みにじった。

「ち、ちよつと！ 何やってるんですか！」

と、ぼくは包丁を取り落としながら、ぼく自身取り乱しながら彼女に言っていた。

モノに変えたのはぼくのはずなのに、さながら大切な親友が暴力を振るわれているのを助けようとするように、さながら常識人のようにぼくは声をあげていた。

「あ？ こいつ殺したのはお兄ちゃんだろ？」

と、鋭利な声で言った。

「殺したって……。そんなこと……」

間違いなく殺したのは、ぼくだがしかし、その事実から目を背けるように、今更言い訳がましくぼくの声は8畳のワンルームに響いた。

「かかった！ なあお兄ちゃん？ 殺したのは悪いこっちゃねえよ。けどな、後先考えずに殺しちまうのはどうかと思っぜ？ 処理が大変だ」

その女性はぼくを咎めるどころか肯定した。首肯した。

「あたしは、まあ、お兄ちゃんみたいな奴に力を貸すことを仕事と
してるのさ。多分、はじめまして、だよな？　あたしの名前は鍛冶^{かじ}
河内^{こうち}鞆^{なま}つてんだ。まあ今後ともよろしくな」

「あ、ぼくは……無花果^{いちじく}人……と言います」

と名前を言ったぼくに驚いたように、彼女はその時初めて凄惨な
表情から驚いた表情に変わった。どんな表情でも絵になる人だ。

「無花果、いちじくか。かかった！　面白い。無花果^{いちじくのひと}の人ね。こり
やいいや」

彼女は僕の名前の何が面白かったのか、しきりに無花果の人と呟
きつつ、『かかった！』という変わった笑い声で笑った。

「こりや、運命、いやカルマ、宿命ってやつかな。まあいい。これ
の処理なんだけど、こいつの職業とか色々教えてくれ。任せろ。処
理は完璧だ」

不思議と信頼できる、不思議と安心できる声で彼女は言った。

それに釣られるように、ぼくは元人間、元僕の親友、現死体、現
モノの説明を始めた。生い立ち、過去の職業、交友関係、現在の職
業に至るまで。余すところなく、僕の知りうる限りを伝えた。

「なるほど……無職、ね。んー……こりやちよおつと厄介かもな」
ともすれば、男性と間違えるような口調でつぶやきつつ、彼女、

鍛冶河内さんは、自前の鞆から長柄の何かを取り出した。それをぼ
くが刀であると自覚したのとほぼ同時に、鞆から刀を抜き、死体を
切断し始めた。そのあまりの凄惨さに、惨さに胃からすっぱいもの
がこみ上げてくる。口を抑え、必死に飲み込んでいる僕を彼女は、
怜悯な目で眺め、そして「辛かったら、トイレにでも行ってくれ。
ここで吐かれたら迷惑だ」と今まで何度も経験してきたかのように
言った。

お言葉に甘えることなく、というよりその光景に目を奪われ、根
を生やしたように足は動かなかった。

「かかった！　上出来上出来。そこにいられるだけで無花果君は優
秀だ」

と人殺しであるところのぼくを優秀だと言った。言い放った。

一時間後。バラバラというのも物足りないくらいに、細かくなったモノを眺めつつ、ぼくと彼女は雑談に花を咲かせていた。不謹慎極まりないが、ぼくは殺人をしたことなど頭の片隅ぐらいにしかなかった。

「あの……鍛冶河内さんは、ぼくの名前を聞いた時、随分と可笑しそうというか、愉快そうにいましたが、僕の名前って何か面白かったですか？ そりゃ無花果なんて名前、そうそう無いですけど……」

「ん？ あー無花果ね。そう無花果ってのはおもしろいものなんだ。クワ科イチジク属の落葉高木で、英語だとfig tree、実の方はfigとかって言うんだけどさ。漢字で花の無い果実って書くだろ？ 花を咲かすことなく、実をつけるように見えることから付けられたんだよ。まあこんなの良くある当て読み、当て字だとは思っただけだ。まあなんていうか聖書とかでは、イスラエルとか、再臨、終末の例えとして使われてたりするんだ。そこにきて、君の名前は無花果人。終末の人、なんて意味にも取れるだろ？ これは面白いと思わねえか？」

と彼女はずいぶん雑学を披露しつつぼくに話しかけてきた。A Tワールド全開で生きているぼくにとって、ここまで話しやすいと感じる、話せるという人はかなり希少だった。

「終末の人……ですか。確かに面白いですね。でもぼくはどちらからっていうと週末の人っぽい感じがしますがね」

と冗談めかして言ってみた。

「終末は週末に来るかもしれないだろ？ そしたら文字通り、君は終末であり週末の人になるわけだ」

「でもぼくは弱くて死ぬっていう感じですよ？ 戦場だと真っ先に殺されるタイプの人間です」

「英語のウィークとかけてるわけか。ふむふむ。まあその点は心配

いらねえと思うぜ？　なんてったって君は終末で、週末、Week endだが、Weakな人間じゃねえんだから。あたしみたいなWeak er Sexってわけでもねえんだろうしよ」

どう考えてもこの人はStrong Sexだと思ったが口に出さずにいた」

「それにしても、ここで殺人が行われる、行われたってことが良くわかりましたね？　正直誰が来たのかと冷や汗もんでしたよ」

彼女は口を歪め、さも楽しいものを見るような目でこう言った。

「ここは、”そういう”場所だからな」

そういう場所？

そういう場所とはどういうことだろうか。

「あの……。それってどういう……？」

「ん？ ああ、京都とかが有名だな。所謂パワースポットって奴に近いと思ってくれ。」そういうの”が集まりやすい場所なんだよ、この部屋は。人殺しが集まりやすい場所、と言っておこうか」

そして鍛冶河内さんは目を逸らさないまま、最後にかかかっとなんた。

パワースポットとはどんなものだろうか。ここ最近テレビなどで紹介されていたりするが、宗教や、風水に基づき、力、気とかが集まりやすい場所だとか。東京もそれに倣った配置になっているとかいないとか。ここはパワースポットの真逆、殺人という負のエネルギーが集まる場所なのだろう。

「あたしのことをまだちゃんと話してなかったな」

と唐突に言った。

なんの脈絡もなく言った。

「何でも屋に近いのかなあ……。いやでも……この場合探偵と言っておこう。この近くで探偵をやってるんだ。つっても基本的に浮気調査から迷子のペット探し、配管工事までなんでもやってる。死体処理はあんまないけど。それでもまあ、ここは”そういうこと”が多いからな」

そこで言葉を切って、こちらの反応を楽しもうとするかのように目の色を変え、こう言った。

「悪いとは思ってないけど、無花果君には死んでもらうよ。人を殺したんだから当然だよな？」

ばくの中で時間が停止した。助けしてくれるのではなかったのだ。都合がよすぎた。

突然現れて、死体を解体し、解体した死体の目の前でぼくと談笑した。

そんな都合のいいことなんてこの世にあるわけないのに。
そんな都合のいいことなんてこの世ではあつてならないことなの
に。

そんな都合のいい殺人なんてこの世にはないのに。

ぼくは親しみやすいこの女性を信用してしまった。

「ん？ おーい、どうした無花果君。表情がないぜ？ あたしはそんなおかしいこと言つた覚えはねえんだけど」

その言葉がきっかけになつたように、弾かれるようにぼくは包丁と三度構えた。
みたび

今度は明確な殺意を持つて。

「騙されたなんて思わない。あなたはぼくを助けるなんて言つてなかつたから。だけどぼくは生きたい。人を殺したけど、それでもぼくは生きたい。ぼくを殺すというなら、ぼくをモノに変えるというなら、迷わない。あなたを殺す」

もうぼくは完全に普通の生活に戻れないようだ。妙に客観的に見てる自分がいる。

この状況を第三者視点で見てるような感じた。

「おいおい、穏やかじゃないな、無花果君。あたしが君の友達を解^パ体した道具を見ただろ？ 打刀^{うちがたな}つつつて日本刀だよ。刀身は一メートル。通常の日本刀よりも遥かに長い。無花果君、君の持つてるその包丁じゃリーチの差で絶対に勝てない」

「それでも、ぼくは生きたい。生きたいから、邪魔な”モノ”は排除する。排除してでもここから逃げてみせる！」

鍛冶河内さんはぼくを見下したように、可笑しそうに、冷たい目で、冷たい口調で言う。

「日本の警察なめてんじゃねえよ。君みたいな二十年やそこらしか生きてない人間の知恵なんかで警察出しぬけるわけねえだろ。科学

の力なめんじやねえよ。生きたい生きたいって散々言ってるけどな、君の友達が死んだ時、君が友達を殺した時、その友達はどうな顔してたよ？ 生きたいって”コレ”も思ってたんじやねえのか？ それを君はあっさり殺した。自分の都合だけで、人を殺してみたいって好奇心だけで。違うか？」

否定できなかった。

鍛冶河内さんは正論を吐く。だけど、それでもぼくは生きたい。自首すれば死刑にはならないはずだ。日本の法律じゃ一人を殺しただけじゃ死刑になんて滅多にならない。まして解体したのは鍛冶河内さんだ。ぼくは頸動脈を断ち切っただけ、そうだ。”それだけ”じゃないか。

ぼくは携帯電話を取り出し警察に電話をしようとした。

しかし携帯電話は消失した。

消滅した。

消された。

目の前の、フランクな女の手で。

その女は鞘に刀を納めながらこう言った。

「ふん。逃げられなくなったと思ったたら今度は国家権力頼みか。節操ねえな。一人の殺人じゃ死刑にならねえって？ 馬鹿じゃねえのか？ あたしを頼れ、信頼しろ。君は死ぬけど、生きる。生き続ける。寿命まで、な」

意味がわからない。

携帯電話を日本刀（打刀だっけ？）で真っ二つにされ、床に落ちる。部品が散乱し、まだ処理前の血だまりの上に落ちた。

「確かに君には死んでもらう。だけど殺すなんて一言も言っていないぜ？ 死亡届を偽造して、死んだことになってもらう。君はあたしの助手としてアンダーグラウンドで生きてもらう。人を殺しただけじゃなく、今も人を、あたしを殺そうとしてる。そんな奴はもう”普通”には戻れないよ」

二ッ！ と笑いながら、鍛冶河内さんは言った。

言いきった。

出るところが出ているスタイルのいい体を目いっぱい逸らして。目いっぱい胸を張って。

信頼しろと言ってくれた。

結論だけを言ってしまうと、鍛冶河内さんに全面謝罪（それこそ床が抜ける勢いで土下座、土下寝をした。土下寝が正しい謝罪スタイルであるか、という点において甚だ疑問だが、鍛冶河内さん本人は愉快そうにぼくを眺め、豪快に笑って許してくれた）し、鍛冶河内さんの探偵事務所に居候をさせていただくことになった。カツコ内に全ての内容を書いてしまったが……そこは御愛嬌。

探偵事務所についていうと、某少年誌に連載されている小学生の居候先の探偵事務所を想像するかと思うが、実際は浮気調査がメインだったりする。鍛冶河内さんの元に居候をはじめて3ヶ月目のこと。こんなことがあった。

コンコン

控えめなノックの音が10畳ほどの事務所に響いた。それ自体がもう珍しいことだった。鍛冶河内さんはどのように生活しているのか、どこからか食料を調達し、ぼくに調理させ毎日食事をとっている。ぼくも御相伴に預かっているのだが……。一体どこからこの食料を手に入れているのか、どこに収入源があるかは回想前のぼくですらわからないのだ。

「はい。開いてますよ。どうぞ」

と、ぼくはドアが開いていることも伝えつつ、内開きのドアを開いた。

「失礼します」

と、ここに来る人では珍しく礼儀正しく入ってきた。

こんな世間の裏にあるような探偵事務所に来る人というのは大抵がどうしようもない人ばかりなのだ。人間的にすごく幼稚な人。自

分のことしか考えていない人。このころのぼくは殺人衝動を抑えるのに必死だった。くだらない人間なんて言うのはいなくなった方がいいと今でも思ってる。

大手企業の役員と結婚したが、会社が倒産し、夫の職が無くなったと同時に、魅力もなくなつた。離婚したいのだが、このままでは自分にお金がありません。より多くのお金がほしいので浮気の証拠を探してくれ、と言つた依頼が多い。

「夫の浮気調査をお願いしたくてきたのですが……」

また浮気調査ですか……。ぼくは心中うんざりする。

ぼくがここに居候を始めてから3か月程経つ。その間に来たお客さんは5人。そのすべてが例外なく浮気調査で、ぼくを同行させない鍛冶河内さんは、なぜか一日で解決してしまうのだ。一体どんな手を使っているのか。ぼくはいまだに知ることができなかった。

なぜぼくを同行させないのか、と一度鍛冶河内さんに聞いたことがある。その時の答えは

「人を連れてくと絶対雨が降る。君はそういう星の下に生まれたんだ。あたしは晴れ女だからな。そういう辛気臭いのは連れてきたくないんだよ」

と答えた。

まあ、実際雨男なんだけど。だけど鍛冶河内さんはぼくの雨をも打ち消すような晴れ女だから、きつとぼくを連れて行きたくない理由があるのだろうと推察する。

「鍛冶河内さんは今、別な仕事でいないんですよ。あと10分くらいで戻ってくると思うので、その辺の椅子に座って待っていてください」

散々鍛冶河内さんから指導された敬語、謙譲語講座を聞き流すことにしているぼくは、お客さんに対して何一つ丁寧な言葉遣いがないかった。だから『これだから最近の若者は』っていう何十年も前から使い古された定型句を使われるのだ。

「あ……はい。……わかりました」

と、その女性は気を悪くした風でもなく、狭い事務所に設置されているイームズチェアに座った。

「しっかしきれいな人だな、と思う。鍛冶河内さんの内面を知らなければ、鍛冶河内さんの圧勝だけど……。それでも一般レベル（鍛冶河内さんはアンダーグラウンドな存在なので、すでに一般じゃない更に顔に反して性格が豪快すぎる……。だまつてりやいいのにつてタイプだ）で見ると相当にきれいな人だ。」

「飲み物何がいいです？　とりあえず紅茶、コーヒー、日本茶、あとお酒。なんでも出せるようにはしていますけど」

その人は逡巡して

「では……、コーヒーをお願いします」

と言った。

ぼくはオリジナルブレンドのコーヒー豆をミルで挽きつつ、コーヒーメーカーにフィルターを設置し、挽きたての豆をフィルターに開けて、蓋を閉じ、水を入れた。数秒後、ゴポツという音とともに第一弾が落ちてきたところでいったんスイッチを切り……。と拘りながらコーヒーを淹れた。コーヒーカップをトレイに乗せて、一流ホテルのウェ이터さんながらに優雅な動きで、その女性の前に音を立てないようにコーヒーを運んだ。

「どうぞ。熱いのでお気をつけて召し上がってください」

ここで、鍛冶河内さんの講座が役に立って様な気がした。

若者らしい爽やかな微笑みで立ち去ろうとした。が。その女性がぼくの袖を指でちょん、とつまんできた。

「あの……あなたはこの事務所のスタッフの方ですか？」

と抱きしめたくなくなるようなうるんだ瞳で、更に上目づかいでぼくを見てきた。

ぼくは思わず答えに詰まりながらも自分はこの居候であること、わけあって鍛冶河内さんにお世話になったことなどを女性に伝えた。その時、どこからか『かかっ！』という笑い声が聞こえてきた。「随分お盛んじゃねえか、人！　初対面の人と話すの苦手だろ？」

随分必死に喋っちゃって」

とあからさまに冷やかしながら言ってきた。というかドアの開閉音すら聞こえなかったのにいつの間にかいたんだ……。

「いつからいたんですか！ この人、依頼人ですよ！ 決してやましい気持ちなんてもんは」

わかったわかったと手でジェスチャーしながら鍛冶河内さんは女性に近づいて行った。

「あたしがこの事務所の探偵、鍛冶河内鞘です。どんな依頼ですか？」

と、途端に真面目トーンに切り替える鍛冶河内さんであった。

「あの……最近夫が浮気しているようで……」

「浮気ね。なるほどなるほど。で、あなた……あーっと先に名前を教えてもらっていいですか？」

「幸野芽久ゆきのめくといいます。あの……ここはその……仕事がとても速いと伺ったものですから……」

随分とおっかなびつくりしゃべる人だ。まあ鍛冶河内さんから出る溢れんばかりのオーラに中あてられりや誰でもそうだろうけど、ぼくときもそうだったからなあ……。

「仕事ね。一日ありや充分さ。あたしは日本一の探偵なんだから」

ニッ！ と口裂け女もびつくりなくらい口角を上げて笑った。

「その……料金の方は……おいくらくらいになるのでしょうか……？」

ちらちら鍛冶河内さんの方を見ながら言う幸野さんであった。

「金はいらない。その代わりこのことは本当に困っている人を助けてやってくれ、親兄弟家族親戚でも、本当に困ってなきや助けるな。だけど本当に困ってるんだったら助けてやってくれ。もちろん、幸野さんでどうしようもなけりやあたしを頼ればいい。だけど、本当に困っている人がいたら、手を貸してやってくれ。それだけ約束してくれりや、あたしは金にや興味ねえし、金はいらない。誰かが幸せになってくれりやそれでいいんだ。もちろん、それは誰

かが不幸になるってことなんだけどな。かかった！ 今回の場合、幸野さんの旦那さんが不幸になると思うんだけど」

と冷淡に言い放った。その言葉に幸野さんはビクツとし、ハンカチを取り出し両手できつく握りしめた。

一方鍛冶河内さんはそんな幸野さんの行動すべてをまるで監視するように（仕事の時だけ見せる目つきで、だ）、舐めまわすように見ていた。鋭い目つきで。

「う、浮気をしているのなら……そうですね……そうですね……当然……ですよね……」

？

疑問が浮かぶ。庇っている？ それとも、見た通り小動物系の人だし、自分の行動で誰かが不幸になるってことに抵抗がある？ のか？ どっちにしる今回もスピード解決になるだろう、とぼくは予想した。

「んじゃ、誰にもいわねえって誓約書だ。こいつにちゃちゃっとサインしてくれ」

といつも通り誓約書を取り出し、サインさせた。

誓約書にはただ一文『困ってる人を助けます』とだけゴシック体、しかも太字、しかも下線、しかも斜字、更に更に網掛までしている。ただ使える機能を使いたかっただけのような有様だな……。こういうところが子供っぽい。

「それじゃあ、今回はあたしと、彼、無花果人で請け負います。結果は明後日の同じ時間に報告しますので、また来てください。必ず良い結果をご報告しますよ」

「よろしくお願いします」

と何度も頭を下げながら、席を立ちいそいそと事務所を出て行った。

「ん？ ぼくも参加するんですか……？」

ぼくにとって、探偵助手として最初の仕事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5894h/>

アメザイク

2010年10月14日12時44分発行